

北九州市学校給食審議会議事概要

- 1 会議名 第1回北九州市学校給食審議会
- 2 議題 給食の状況について
- 3 開催日時 平成27年8月10日(月) 15:00~16:30
- 4 開催場所 小倉北区役所庁舎東棟5階 503会議室
- 5 出席者氏名 委員(11名:順不同、敬称略)
 - 奥村 直樹 (北九州市議会議員)
 - 田中 正章 (北九州市医師会理事)
 - 福地 靖範 (北九州市医師会理事)
 - 白水 京子 (北九州市薬剤師会副会長)
 - 青木 るみ子 (西南女学院大学講師)
 - 新庄 希代子 (北九州市PTA協議会副会長)
 - 多田 政博 (北九州市PTA協議会副会長)
 - 高田 利弘 ((公財)北九州市学校給食協会理事長)
 - 上村 ゆかり (北九州市立中原小学校長)
 - 中島 由紀子 (北九州市立浅川小学校長)
 - 田中 朋子 (北九州市立菅生中学校長)

6 議事要旨

◆「給食の状況」について事務局より説明。

◇委員 ・ここでは出ていないが、給食費の未納、滞納について、ある県か市では、未納、滞納している家庭にはもう給食を提供しないということだが、その点では北九州市はどうか。

◆事務局 ・他都市において、そのような扱いをするといった情報は、新聞報道等で把握しているが、北九州市において同様な扱いをするという意見は今のところ出てはいない。

◇委員 ・残食率の変化について説明があったが、具体的な目標値というものはあるか。

◆事務局 ・中学校の残食率について、数字的な目標はなく、小学校並にしたいと考えてい

る。

◇委員 ・小学校の中で、低学年と高学年では残食率が変わってくるのではないか。中学校で急に残食が増えるのではなく、高学年になるにつれ、自我が出てきて、だんだん残食が増えるということではないのか。

◆事務局 ・統計的なものはないが、聞き取りの範囲では、1年生が少なく、6年生になると多いということはそれほどない。

また、小学校でも残食の多い学校、少ない学校があるように、中学校でも小学生並に低い学校があるため、学校としての取り組みが大きいと考えている。

◇委員 ・我々が小学校の頃は、残ってまで食べさせられた記憶があるが、今はその辺の指導はどうか。

◇委員 ・ある程度時間は区切るが、絶対に食べさせるということはない。最初から量を減らす、13時半になったらそこで終わる等の対応は学校で決めている。

◇委員 ・量もそうだが、好き嫌いはどうか。最近の子どもは贅沢になっているので、これは食べられないと全く手を付けないこともある。それはそれでいいということか。

◇委員 ・うちの学校は、一口でも食べなさいと小さい時から指導しており、学年が上がるとつれ、量も増やしている。初めから食べないものは、そのまま食べさせないということは、どの学校もしていないと思う。無理矢理に食べなさいと強制まではしないが、少しは食べましょうといった声掛けは中学校でもやっていると思う。

◇委員 ・地元の小学校で給食を食べさせてもらう機会があり、学年によってもやり方が違う印象を受けた。最初から分量を調節したり、積極的にお代わりさせるクラスもあった。そのような指導をやっていけば残食率は減ると思うが、最低限これだけ食べないといけないという量は決まっているのか。ある程度、増減があることは分かったが、カロリーや栄養の関係で最低限の基準はあるのか。

◆事務局 ・ある程度の基準量というものはある。あくまでも年齢に応じた平均の数字になっており、それを給食室で計量してクラスに届けている。ただ、やはり個人差があり、運動量も違うため個々に応じた量を加減していただいている。

◇委員 ・成長等を見て対応することが一番だと思う。先生方の裁量だと思うが、残食率だけを減らすとなれば、この子はあまり食べないから、この子はいっぱい食べさせようといった違う話になるので、できれば男女比率等詳しく調べ対応していた

だきたい。

◆事務局 ・ 男女別、クラス別の統計はとっていない。給食室に帰ってきた量で学校ごとの残食率を比較している。残食を減らすひとつの手段として、クラスマッチのような形で残食率の低さを競わせているといった事例はあるが、男女差を実質的な数値として出すのは難しいというのが現状である。

◇委員 ・ 小学校、中学校ともにアレルギーの子がたくさん増えてきているが、市内でアナフィラキシーの症状が出た事例は、ここ 2、3 年であるか。

◆事務局 ・ 平成 26 年度の各学校から学校保健課へのアレルギー事故等の報告は、1 学期は 8 件、2 学期が 15 件、3 学期が 7 件程度で、小・中合わせて約 30 件であった。25 年度は年間で 13 件程度だったと思う。

これまでエピペンを使用した案件が 2 件あったと報告を受けている。これについては、これまでのアレルギー研修が学校現場でしっかり伝達され、実践に活かされたと考えている。

◇委員 ・ アレルギーの件について、今は診断書がなくて、家庭からの口頭での申し出で別の給食を出しているということか。

◆事務局 ・ 現在、北九州では、単品の一部取り除き、副食の一部取り除き、除去食の 3 種類をアレルギー対応給食と呼んで実施している。そのうちの除去食だけは、医者からの診断書を提出してもらっているが、前者 2 種類については、診断書自体は提出がなくてもアレルギー対応している。

◇委員 ・ アレルギーに関しては、学校でも相当気を使っている。保護者にその日の材料が入った献立表を渡して、食べられるとか食べられないかをチェックしてもらい、学校に提出してもらった後、養護教諭、栄養教諭、担任、管理職の 4 人で突き合せをして正しいかどうかチェックしている。また、それを教室に貼って担任がチェックしているかを管理職が確認に行っている状況である。

◇委員 ・ 昔に比べたら、アレルギーの子というのは増えているのか。我々の時代は聞いたことがないような気がするが。

◆事務局 ・ 今現在、アレルギー対応給食の対象者は、約 2,200 人であり、児童生徒約 75,000 人のうちの約 29 パーセントとなっている。これは全国的な傾向として上がってきている。

事務局：

北九州市教育委員会事務局学務部学校保健課

TEL 093-582-2381